

# 三次結合複合動詞の構成要素について

——二次結合との比較を通して——

林 翠 芳

## 1. はじめに

複合動詞とは複数の動詞によって構成されるという形態的な特徴を持つ動詞を指している。一般に「動詞＋動詞」の二次結合の複合動詞が多いが、「複数の動詞」ということが可能である以上、三次結合の複合動詞或いは四次結合の複合動詞が存在しても不思議ではない。そこで、本稿は主に三次結合の複合動詞を中心に考察を進めて行きたい。そして、三次結合の複合動詞「動詞＋動詞＋動詞」を仮にそれぞれ前項要素、中項要素、後項要素と呼ぶことにする。用例は『複合動詞資料集』を利用し、そこから185例ほど抽出することができた。なお、四次結合の複合動詞は、上記資料集から「し～立て～上げ＝得る」の一例しかなく、それを入れると186例となる。

考察に当たって、二次結合複合動詞の構成要素も同時に取り上げ、二次結合複合動詞と三次結合複合動詞との関連性などについて検討し、また、各項の要素が『分類語彙表』における分布形態を調べ、構成要素の使用頻度と『分類語彙表』における意味の分布との関係や、三次結合の複合動詞の構成要素の特徴を明らかにしたいと思う。

## 2. 中項要素と後項要素の相違点

三次結合複合動詞の構成要素について、前項要素と後項要素が二次結合複合動詞の場合とどう違うのかということがあり、同時に、中項にくる要素がどのような性質を持っているのか、というのも注目すべきところである。なぜならば、三次結合複合動詞の大方は、二次結合複合動詞という影の形がすでに存在しているからである。つまり「前項＋中項」或いは「中項＋後項」の形である。現に185件の三次結合複合動詞について、同『複合動詞資料集』に採録されている二次結合複合動詞と照らし合わせた場合、表1のような結果を得ている。

表 1

項の組合せ	数	%
「前項+中項」にのみ	100 (100+64)	88.64
「中項+後項」にのみ	7 (7+64)	38.37
「前+中」「中+後」の両方に	64	34.59
二次の該当例なし	14	7.56

上記数字で分かるように「前項+中項」に164例も存在し、全体の88%をしめ、そして「中項+後項」は71例存在し、全体の38%を占めている。特に「前項+中項」と「中項+後項」の両方に二次結合の用例が64件も存在し、全体の34%も占め、注目に値するところである。また、この数字から中項要素は前項要素と後項要素の両方の特徴を備わっているということが推定でき、取分け後項要素に近い特徴を持っているということが推定できる。また「前項+中項」の164件の出典をみると、<sup>①</sup>136(延べ)件は辞書の見出し語として採録されている。一方、「中項+後項」の方は71件のうち、26件のみ辞書に見出し語として掲載されている。それは後項要素となる「～始める」「～得る」「～続ける」などのような語は一般に辞書に載せないというのが一つの理由として考えられる。いま一つは二語の結びつきがまだ弱いということも考えられる。では中項要素に一体どのような特徴があるのか、また中項と後項にくる要素の類似点と相違点が何であるのか、ここでこの二点を中心に考察を進めたい。

2-1 二次結合とのかかわり

まず二次結合とのかかわりについてみると、三次結合複合動詞の構成要素は今回調べた範囲では中項要素の異なり語数が最も多かった。各項の異なり語数と語の負担率は表2の通りである。

表 2

		数					負担率
		複合動詞数	総要素数	共通要素	各項のみ	各項要素	
三 次	前項	185	178	29	60	74	2.5
	中項				64	92	2.01
	後項				25	43	4.3
二 次	前項	7432	2166	574	1333	1907	3.89
	後項				259	833	8.92

注：二次結合の統計は『複合動詞資料集』による

表2で分かるように各次の構成要素の負担率は、共に後項要素が高く、同一語の使用率が高いことを示している。また中項にくる要素の異なり語数は92件で、前項よ

りもバラエティに富んでいる。では三次結合複合動詞の各項の上位を占めている構成要素にどんなものがあるのか、二次の使用度数と合わせて表3で見ることにする。なお、紙幅の関係でそれぞれ使用度数3までの語と限定した。また、表2で挙げた29件の各項の共通要素も同時に示す。

表3

要素	二次結合		三次結合		
	前項	後項	前項	中項	後項
引く	140	3	24		
打つ	104	4	8		
言う	107	1	5		
突く	75	0	4		
押す	95	1	4		
書く	66	0	3		
追う	35	0	3		
呼ぶ	33	0	3		
結ぶ	12	2	3		
付ける	20	143		10	
ずる	6	2		9	
詰める	9	28		7	
くる	0	2		5	
立てる	19	72		4	
替える	1	51		4	
戻す	0	15		4	
着く				4	
掛かる	5	90		3	
得る	3	432			27
始める	2	399			23
兼ねる	2	110			12
続ける	4	169			7
過ぎる	3	173			6
返る	2	47			5
おる	0	33			3
掛ける	19	236	1	3	16
切る	55	207	5	1	3
見る	105	9	29	1	
取る	114	70	10	4	
落ちる	22	27	6	1	
立つ	55	57	4	1	
搔く	59	2	3	1	
張る	24	8	2	8	
する	47	0	2	1	
受ける	22	11	2	1	
付く	12	75	1	6	
駆ける	22	1	1	2	
反る	1	3	1	1	
行く	29	35	1		1
出す	13	432		15	25
合う	0	273		3	16
込む	5	231		3	4
上げる	3	129		3	2
入る	9	58		3	1
回す	1	43		2	4
返す	0	73		2	3
回る	11	45		1	2
直す	1	72		1	1
上がる	7	71		1	1
抜く	12	50		1	1
通す	4	49		1	1
歩く	14	33		1	1
起こす	5	18		1	1
巻く	21	4		1	1

注:「着く」という漢字を用いた二次結合の用例はなかった。

前頁の表で分かるように、三次結合で上位を示す構成要素は二次結合においても比較的使用頻度が高い。項別に見ていくと、前項要素において二次結合で「引く、打つ、言う、押す、突く」など使用度数の高いものは、三次結合においても同様の結果を得ている。そして、後項要素においては、前項要素と同様で二次結合で「得る、始める、兼ねる、過ぎる」などの使用度数の高いものは、三次結合でも使用例が多い。また、中項要素については、その二次結合における前項と後項の使用頻度をみると、ほとんどは後項の使用度数が高いものによって占められている。中項で度数1となっている要素「くびる、醒ます、干る、垂れる、穿つ、抜う、解ける、ぼける、荒ぶ、戯れる、転ばす、比べる、乱す」などは二次結合においても、それぞれ使用例が極めて少ない。特に中項要素で度数が上位になっている「ずる」「くる」はそれぞれ二次結合の使用例よりも多くなっている。その具体例を見ると、二次結合では「ずり上げる、ずり落ちる、ずり下りる、ずり下がる、ずり出す」「這いずる、引きずる」とあり、三次結合では「駆けずり回る、引きずり回る、引きずり込む、引きずり出す、引きずり落とす、引きずり回す、引きずり上げる、引きずり下ろす、引きずり行く」とある。三次結合の9例のうち8例は「引きずり～」の形で、後項には方向を示すような語が中心となって接続されている。これは「引きずる」の結合関係が極めて強いことを意味し、また、その9例のうち「～上げる、～下ろす、～行く」を除き、他の6例は全部三次結合の形で辞書に見出し語として載せてあり、三次結合そのままが一語としての性格が強いということを物語っている。

一方「くる」の二次結合の例を見ると、「こねくる、塗りくる」の二例しかなく、三次結合では「こねくり返す、反りくり返る、煮えくり返る、引っくり返す、引っくり返る」とあり、後項にくる要素が「返す、返る」と限られている。また後三例は辞書に掲載されている語である。ちなみに三次結合複合動詞185件のうち、僅か17件のみ辞書の見出し語として掲載され、「ずる」「くる」はそのうちの8例を占めている。このことから三次結合の複合動詞が臨時的な結合関係をなしているものが多いと見ることができる。

また29件の共通要素について見ると、まず三項共通の要素「掛ける」「切る」は、二次結合では共に後項要素としてよく用いられたが、前項要素としても特に「切る」の方は55件という比較的多くの用例が見られる。「切る」「掛ける」は前項要素として用いられるときは単独動詞本来の意味を保持しているが、後項要素として用いられるときは単独動詞本来の意味から離れ、独自の意味をなしている。【複合動詞資料集】にはちょうどこの二語による二次結合の複合動詞「掛け切る」「切り掛ける」がある。「切る」「掛

ける」のこのような前項要素にも後項要素にもなり得ることから三次結合の中項にも位置し得たのではないか。

また前項と中項の共通要素は、二次結合では「落ちる」「立つ」が両項要素として活躍し、「付く」は後項としての用例が多い。「張る」は二次結合では前項の方がリードしているが、三次結合では後項の方が逆転している状態で、その具体例を見ると「引っ張り＝出す」のように、「引っ張り～」の形で6語も構成している。「駆ける」も「追い－駆け＝合う」「追い－駆け＝回す」とあるように、前－中は同一要素による構成となっている。残りの「見る、搔く」などは二次結合と三次結合では共に前項の方に用例が多い。

一方、中項と後項の共通要素は、二次結合では後項の用例数が圧倒的に多い。特に「出す、合う、込む、上げる」などは後項要素としての使用率が極めて高く、三次結合の中項要素としても用いられる。言い換えると、これらの要素の後項にはさらに他の要素が付くことが可能だったわけである。

「出す」を例にとると、二次結合では前項としての「出す」は「合う、得る、遅れる、憎む、掛ける、兼ねる、切る、渋る、過ぎる、尽くす、続ける、抜く、始める」などの語と接続しているが、三次結合では「言い出し掛ける、言い出し兼ねる、言い出しそびれる、売り出し掛ける、書き出し始める、作り出し得る、乗り出し過ぎる、切り出し兼ねる、引き出し得る、拾い出し得る、突き出し合う、見出し得る、見出し掛ける、見出し兼ねる、見出し始める」などの例がある。「そびれる」を除くと、全部二次結合の後項で用いられている要素であり、それも「得る、掛ける、兼ねる」に集中されている。

## 2-2 三次結合複合動詞の中項要素と後項要素の相違点

複合動詞の後項動詞の意味について、武部良明（1953）では（175語）についての機能的な分類、姫野昌子（1988）ではよく使われる動詞（約70語）についての分類などがあるが、ここでは便宜上、新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子（1987）の分類をもとに、以下のように分類し、三次結合における中項と後項の主要な要素について考察する。

### ①方向性を表すもの

中項：上がる、上げる、込む、入る、回す、回る、返す、移る、去る、下げる、合う

後項：上がる、上げる、込む、入る、回す、回る、返す、返る、下ろす、下がる、合う

### ②時間相を表すもの

中項：掛ける、掛かる、続く

後項：掛ける、始める、出す、続ける

### ③程度を強調するもの

中項：入る、抜く、切る、立てる

後項：入る、抜く、切る、果てる、払う

## ④完遂を表すもの

中項：通す，抜く，上げる，切る

後項：通す，抜く，上げる，切る

## ⑥失敗・消滅・変形を表すもの

中項：去る，潰す

後項：

## ⑧可能・不可能を表すもの

中項：

後項：得る，兼ねる

## ⑤付着を表すもの

中項：付く，付ける，詰める

後項：

## ⑦再試行を表すもの

中項：直す，返す

後項：直す，返す

## ⑨過不足を表すもの

中項：

後項：過ぎる，損なう

こうして分類してみると，⑤⑥の項には後項要素の該当例がないということが分かり，つまり，三次結合の後項には付着を表すもの，失敗・消滅・変形を表すものが位置しにくいということが言える。また⑧⑨の項には中項要素の該当例がなく，可能・不可能・過不足を表すものが中項要素になりにくいと言える。さらに時間相を表すものの中で「始める，続ける」の二語も中項要素になりにくいのである。①③④⑦の項は中項にも後項にも位置し得る。ここで中項の後に接続する後項要素の具体例を幾つか見ることしよう。

～出し～（始める，掛ける，兼ねる，得る，過ぎる，合う，そびれる）

～付け～（始める，合う，得る，出す，あぐねる，当たる，損なう）

～付き～（始める，掛ける，合う，得る，泊る）

～詰め～（始める，合う，出す，続ける，返す，過ぎる）

～込み～（得る，掛ける，兼ねる）

～掛け～（始める，合う，出す）

～上げ～（始める，掛ける，おる）

～替え～（始める，掛ける，出す，得る）

～戻し～（掛ける，得る，兼ねる）

～合い～（出す）

このように中項の後項にくる要素は「始める，合う，兼ねる，出す，過ぎる，続ける，得る」などの補助動詞的な要素やアスペクトを表すものが多く，「始める，続ける，兼ねる，過ぎる，得る」などは，中項に出現しにくい要素である。

なお，この分類はおおのの動詞が複合動詞の後項要素として活躍する時に示す意味を中心に分類しているので，具体例を合わせると若干ずれが生じる可能性がある。

### 3. 『分類語彙表』における三次結合複合動詞構成要素の分類傾向

【分類語彙表】で三次結合複合動詞の構成要素がどのような分布になっているのか、また二次結合複合動詞の構成要素と比較した場合、どういう特徴を持っているのか考察してみたい。なお、二次結合複合動詞の構成要素については度数順構成要素上位度数20までの語と限定し、度数20までの動詞は全部で130語あった<sup>②</sup>。これらの動詞については帰無仮説を立て、有意差検定を行い、 $X^2$ 値分布の5% (3.84146) を基準にして、それぞれの動詞の複合動詞における位置を判別した。この判例によって、前項・後項・両項のそれぞれに位置しやすい動詞は56, 61, 13という数字を得ている。以下三次結合複合動詞の構成要素と二次結合複合動詞の構成要素が『分類語彙表』における分布数を表4に示す。

表4

次	分類 語数 項	2・1	2・3	2・5	二項以上 にまたがる	合計 (ことなり)
		2133語	2137語	467語		
二 次	前項	20( 7)	27( 7)	1( 2)	8	56
	後項	48( 8)	4( 7)	1( 1)	8	61
	両項	10( 2)	1( 2)		2	13
三 次	前項	33(10)	25(11)	4( 3)	12	74
	中項	64(11)	16(11)	1( 2)	11	92
	後項	27( 7)	7( 7)	1( 2)	8	43

注：( )の中の数字は各項が他の分類とかさなる数字である。

まず分布状況について見ると、二次結合では前項要素が2・3の精神及び行為に、そして後項要素が2・1の抽象的關係にそれぞれ多く分布しているのに対して、三次結合では前項要素、中項要素、後項要素は共に2・1に分布例が多いが、前項要素は中項要素や後項要素と比べた場合、やはり2・3における分布例が多いということが分かる。上記数字から傾向として前項要素には2・3の動詞が、後項要素には2・1の動詞がそれぞれ位置しやすいということが分かる。これは二次結合と三次結合の共通した特徴であると言えよう。そして三次結合の中項要素は「受け－取り＝兼ねる」のような例は、後項要素「兼ねる」を外したら「受け＝取る」のように二次結合として考える場合「取る」は後項要素となるので、三次結合の中項要素は後項に近い特徴を持っていると推定できる。勿論「押す＝取り－巻く」のように前項要素「押す」を外したら「取る」は前項要素となる例も少しある。

また各項の要素とも2・1では2・14, 2・17, 2・18, 2・19に分布している例が少なく、2・

15には例が集中している。これは『分類語彙表』における2・15に分布されている語自体が多いということと関連している。『分類語彙表』における2・1の総数は2133語であり、そのうち2・15は1543語全体の72%をも占めている。一方2・3では2・32, 2・35, 2・36に分布している例が少ない。では、おのおのの項の細分類を表5に示す。(紙幅の関係で具体例を省略し、その数字のみを示す)

表5

分類	次 項 語数	三次結合			二次結合		
		前項	中項	後項	前項	後項	両項
2・1	2133	43	74	34	27	56	12
2・11	137	1	1	4	1	2	
2・12	176	5	7	5	3	8	2
2・13	91	2	4	1	1	1	1
2・14	10						
2・15	1543	37	66	29	21	50	11
2・16	66	1	1	2	1	1	
2・17	44			1		1	
2・18	32						
2・19	34		1				
2・3	2137	36	27	14	34	11	3
2・30	743	8	10	4	11	5	
2・31	221	5	3		6		
2・32	21						
2・33	321	15	6	2	11	1	
2・34	56	1	2	2	1		1
2・35	178	1			1	1	
2・36	201	1	1			1	
2・37	172	4	4	5	4	3	3
2・38	224	4	2	1	2	1	
2・5	467	7	3	3	3	2	
2・50	114		1	1			
2・51	181	5	2	1	2		
2・58	171	2		1	1	2	

注：同一分類内においても例えば「出す」は2・121と2・1530二分類以上にまたがっている動詞があるので、合計数字は各項の異なり語数と一致しない場合がある。

表5のように2・14, 2・18, 2・19や2・32などは、もともとそこに分類されている動詞が少ないため、複合動詞の構成要素の分布が少ないというのあれば、2・35, 2・36のようにそこに分類されている動詞の数は少なくないものの、複合動詞の構成要素の分布例が極端に少ないものもある。しかし、全体的には三次の前項と二次の前項及びそれぞれの後



項は分布例数に多少差があるものの、その分布状況は比較的一致していると言える。なお、【分類語彙表】に取り上げている動詞は複合動詞も含まれている<sup>④</sup>。

では、具体的に三次結合の各項に位置しやすい動詞の意味についてみると、まず2・1の抽象的關係は、2・111～2・113の關係、異同、包摂などは、前項の分布例はそれぞれ1例のみで後項にくらべ出現率が低く、後項には合う、兼ねる、当たるなどの語がある。2・120～2・125の出現、発生などは、前・中・後の各項とも分布例が割合に多く、前項の「消える」「出る」に対して中項は「消す」、また中項・後項は「出す」があり、自動詞、他動詞の対立をなしている。確かに「消える」と「出る」は後項要素としてはあまり用いられないようだ。2・130～2・135の整備、でき、損じなどは、前項、後項には1、2例程度で、中項の要素も「狂う、荒ぶ、乱す」とあるように、二次結合における使用例もごく僅かである。

2・15は全体の語数が1543語もあるため、その細分類でみることにする。まず2・1580～2・1583(115語)の増減、伸縮などは、前、中、後にわたって該当例がなく、二次結合でも同様であり、この分類の語は複合動詞の構成要素に成りにくいと言えるのではないかと。勿論二次結合の使用度数の低い要素になると、分布例が多少見られる可能性がある。2・1500～2・1503(94語)の変化、開始、連続などにおける「直す、始める、続ける」のような語は後項要素には成りやすいが、前項要素には成りにくいようだ。2・1510～2・1516(199語)の動き、停止、転倒などには、16語ほどの中項要素が分布し、そのうち「立つ、受ける、掛ける」は前項と共通の要素であり、「回す、回る、起こす、掛ける」は後項と同一の要素となっている。二次結合の後項もここに分布される語が多いようだ。2・1521～2・1527(265語)は移動、流れ、往復の分類であり、2・1530～2・1533(183語)は出入り、込みなどの分類であり、2・1540～2・1541(103語)は上がり下がりなど、2・1550～2・1556(201語)は合い、組みなど、2・1570～2・1571(196語)は変形、破壊などの分類となっている。これらの分類にある語は、中項、後項においては移動、方向、完遂、失敗、再試行、程度などの文法的な役割を果しており、複合動詞の後項度数の高い要素の大半はこの2・15の分類に納まっているようだ。同じこの2・15に分布される語でも、前項要素の場合は「寝る、立つ、ほどける、這う、追う、飛ぶ、汲む、乗る、撒く、縛る、折る、切る、掘る」とあるように、具体的な動作を表す語が多いというのが特徴的である。そして前項要素でもう一つ注目すべきところは2・1560～2・1565の分類である。この分類に属する「打つ、ぶつ、引く、突く、押す」などの語は複合動詞においては接頭辞としてよく活躍する。

2・3の精神及び行為ではまず複合動詞の構成要素となりにくい分類からみると、2・32

創作, 2・350～2・353 交わり, 約束など, 2・360～2・368 支配, 教育, 制約などと2・342～2・343 行為, 失敗などの分類にある語は複合動詞の構成要素として成りにくいことが分かった。そして複合動詞の構成要素の分布が比較的多かった分類は2・300～2・309 感覚, 気分, 思考, 見る, 聞くなどである。2・310～2・315 表現, 書き, 読みの分類は後項にはなりにくい, 中項要素には「歌う, 表す, 述べる」などの例があり, 前項要素の性格も持っているいい例である。2・330～2・339 生活, 遊び, 足・手・口の動作の分類や2・381～2・386 処理, 扱いの分類も同様に後項にはあまり用いられず, 前項に用例が集中している。中でも手の動作がよく複合動詞の前項要素として活躍する。一方2・372～2・379に出現する中項, 後項要素「取る, 上げる, 受ける, 返す」などは2・1の分類と跨がっている語である。

2・3における複合動詞構成要素の分布をまとめると, 前項要素にはよく用いられるが, 後項要素は前項に比べ使用率が低く, また中項要素は後項より分布例が多かったが, 「～くり～」を除くと殆んどは度数1の語である。二次結合も2・3に分布している後項要素の多くは「返す, 掛ける, 上げる, 直す, 寄せる」など2・1とかけ持っている動詞が多く, 複合動詞の内部においては独自の意味をなしているものが多い。

また, これまでに触れなかったが, 二次結合で前項と後項の両項に位置しやすい13の要素の大半は2・1に分布し, 「出る, 行く, 進む, 抜ける, 通る, 上る, 落ちる, 締める, 置く, 立つ, 受ける, 払う」などはそれである。そして三次結合の29の共通要素は前と中の共通要素は2・1と2・3にほぼ同じ割合で分布しているが, 前項の使用度数がやや高いようだ。一方, 中と後の共通要素の殆んどは2・1に分布している。この共通要素もある程度, 前・中・後のそれぞれの項が【分類語彙表】における分布状況を反映していると言える。

2・5の自然現象は前・中・後の三項にともに分布例が見られたが, 中項と後項に現われた動詞の2・5における意味をみると, 中項「消す≠火」, 後項「損う≠病」「澄ます≠凝り, 粘り, 澄ます」のように, どれも複合動詞の中項或いは後項の意味とずれており, また以上挙げた動詞は皆2・1か2・3の分類と跨がっているものである。三次結合では中→後の組合せ「～干一からびる」の一語と二次結合「～殺す」だけである。とすると中項と後項はあまり2・5の動詞が用いられず, 2・5は前項に比較的好く用いられると考えてよいであろう。

#### 4. 終わりに

以上三次結合の複合動詞の構成要素について二次結合の場合と比較しながら考察した。

江戸時代までは濁音などの関係で複合動詞を一語として認めないと一般にいられているが、現代語においても他の複合語に比べ、複合動詞の濁音率<sup>⑤</sup>が低く、一語としての定着度が低い。『複合動詞資料集』の統計<sup>⑥</sup>を見ても分かるように、辞書に掲載されている複合動詞の数は全体の37%に過ぎず、この三次結合の複合動詞となると185語のうち17語のみ辞書の見出し語として掲載され、全体の9.18%に過ぎない。「複合語は単語と文との間に位置するものであり、いわば圧縮された文と言ってよい」と阪倉篤義(1980)で言うように複合動詞、殊にこの三次結合の複合動詞がまさに圧縮された文であると言えよう。

複合動詞のこうした特徴から、その結合関係も臨時的な、その場限りの使い方をなしているものが多い。林四郎(1982)では臨時的に結合される語を臨時一語と呼んでいる。また、玉村文郎(1975)では臨時一語を含めた複合語の結合契機について述べられている。本稿ではこのいわゆる臨時一語的な性格を持っている三次結合複合動詞の構成要素の形式的な分類や分布状況を中心に触れたわけだが、語の意味構造や語の結合関係、二次結合と三次結合の語レベルの関係などについてはまだ考察する必要がある、これを後論で述べることにしたい。

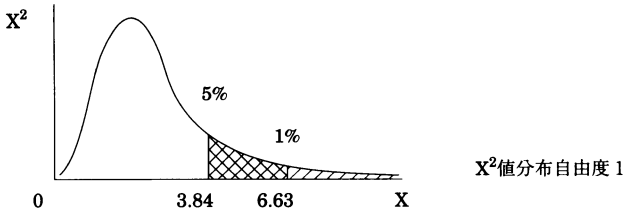
注

- ① 136と26は「言い出し=掛ける」「言い出し=兼ねる」のように「言い出す」を延べで数えている。
- ② この130語の位置判別は修士論文で作業したものを利用している。
- ③ つまり、それぞれの要素を前項要素にも後項要素にも等しく現れるとする。「出す」を例にとる。

出す	前項	後項	計
実測値	13	432	445
理論値	222.5	222.5	

$$X^2 = \frac{(13-222.5)^2}{222.5} + \frac{(432-222.5)^2}{222.5}$$

$$= 394.5191$$



従って、「出す」が前項にも後項にも等しく現れるという仮説が起こるのは1%以下なので

- 危険率は1%以下である。仮説が成立しないので「出す」は後項要素である。
- ④ 例えば、2・14に分類されている14語のうち、7語が複合動詞という形態をなし、3語のみ単純動詞である。
- ⑤ 戸田綾子が230回(1993, 8, 31)同志社国語学研究会において、複合動詞の連濁について口頭発表された時、「動詞連用形+動詞」の形に連濁率が低く、複合語としての熟度合いに問題が感じられたと述べられた。
- ⑥ 『複合動詞資料集』の用例は大きく分けて「文学作品等データ」と「辞書データ」の二種類からなる。

#### 参考文献

- ① 野村雅昭・石井正彦・林 翠芳『複合動詞資料集』(特定研究「言語データの収集と処理の研究」1987)
- ② 国立国語研究所資料集6『分類語彙表』(秀英出版, 1985, 25版)
- ③ 新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子『複合動詞』——外国人のための日本語例文・問題シリーズ4——(荒竹出版, 1987)
- ④ 玉村文郎「和語は造語力が弱いのか」(日本語講座1『現代日本語の単語と文字』汐文社, 1975)
- ⑤ 林 四郎「臨時一語の構造」(『国語学』131集, 1982, 12, 31)
- ⑥ 武部良明「複合動詞における補助動詞的要素について」(『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂, 1953)
- ⑦ 姫野昌子「動詞連用形に付く補助動詞及び複合動詞後項」(『日本語教育事典』大修館書店, 1988, 縮刷版2版)
- ⑧ 阪倉篤義「複合語」(『国語学大辞典』東京堂出版, 1980)
- ⑨ 金田一春彦「国語アクセント史の研究が何に役立つか」(『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂, 1953)
- ⑩ 石井正彦「辞書に載る複合動詞・載らない複合動詞」(『日本語学』5, 1988)
- ⑪ 森田良行「日本語研究の問題点——日本語複合動詞について——」(早大語学教育研究所『講座日本語教育』14, 1978)
- ⑫ 肥田野直・瀬谷正敏・大川信明『心理教育統計学』(培風館, 1963, 3, 10, 初版第3刷)